

記念講演

ARS LONGA, VITA BREVIS

「世短意常多」

齋 藤

たけし
勇

—

ただいま学長に代って日高第四郎先生から、まことに身にあまる御挨拶を頂戴いたしまして、恐縮に存じます。ICU 創立以来すでに十数年を経しておりますが、私は幸いにして初めの頃から教授会の末席に列することができました。けれども私は就任当時すでに ICU の定年を越えておりました。湯浅前学長の招聘を受けた時は、「それでは、これから三年、七十になる時まで講義をいたしましょう。けれどもアドミニストレーションに関することはまことに不得手でありますから、一切お断り致します」という条件で御引受けしたのであります。そしてはじめの三年間を過ごした時に、私はもうやめさせていただきますと申し上げたのでありますけれども、それからつい八年が過ぎてしまい、もう老いぼれて、今は職責を果すことができるとは考えられないような者になりました。それで、ICU の祿を食むことはあいすまぬことと思ひまして、辞表を出した次第であります。

私は今はもとより、前から記憶が悪い男であります。——今日の話は、学生に対する言葉でありまして、先生がたに申しあげるのではありません。御諒承を願います。——学生諸君にたいして私はまことに相済まんと思っていることはいろいろありますが、一つとくに今ここで勘弁していただきことがあります。それは教室で私が幾度か真剣になって叱った、ということではありません。私の記憶力が大変弱いので、諸君の名前をおぼえないことです。これは教師としてまことに悪いこと、恥ずかしいことです。

私の恩師である植村正久牧師の亡くなられてから、今年は丁度四十年に当りますので、先日その記念会がありまして、私はそこでまことに感銘の深い話を聞きました。植村先生はよく伝道旅行に出かけましたが、度々台湾にも行かれました。ある時、台湾の教会で、「何の某君という会員の病気は近頃どうですか」と、その牧師に言われたそうです。ところが赴任後あまり古くはないその牧師は、困ったことに、その会員の近況をすこしも知りませんでした。植民地の常として、会員に出入りが多いためばかりではなく、その会員何某は教会に長い間出席しなかったため、覚えていなかったのだそうです。それで牧師はまことに相済まんと心から悔いたそうであります。それから先生は、「それじゃ君、一緒に訪問しよう」と言って、大変忙しい間に、病氣見舞かたがた牧師と一緒に訪問をなさったという話でした。私はそれを聞いて、私自身の学生にたいする甚だ無責任なことを恥じまして、感無量でありました。この点、どうぞおゆるしを願います。そういうわけで私は数年前から、退職することを当然と心得ていたものであります。

学校は学年末になりますと、卒業生を送り、また新入生を迎えますが、こういう時には、とくにこの感が深くなります。ホウマーの *Odyssey* に、このばあい大変適当な言葉があります。これは、主人というものは、新しく来る客を喜んで迎えると同時に、出て行く客にはその行く手の旅路安かれと祈るものだ、という意味の言葉です。それを第十八世紀の代表的詩人は、極めて簡潔に、

Welcome the coming, speed the parting guest.

(Alexander Pope 訳 *Odyssey*, XV. 83)

と訳しました。そして、これは、ちょうど三月にどこの学校の教師も考えておるようなことを非常に巧みに言い表わしたものととれます。私は去り行く人、新たに来る人の名前を本当はよくおぼえていなければならないと思いながら、それができないのであります。ICU は設備においてはもちろん、その他万般のことについて特に学生第一のようですから、ひとり

びとりの学生に十分な注意を払うことのできない教師は無用の長物ということになります。（ただしICUとしては、教師のための設備などについても、もっと考えるべき時期になっているようです。——附記）

二

私は東京大学で教えること三十五年、東京女子大学では六年、そしてICUには十一年間お世話になりました。半世紀以上にわたる長い間、大学に職を奉じていたのでありますが、何一つこれとは誇ることが出来ませんでした。平凡な男が平凡な講義をして、しかも学生一人一人にたいする心配りがありながら、責任を果すことが出来ませんでした。恥ずかしいことです。

一生懸命になって講義をしたつもりではありますけれども、その講義にも間違いがありました。気がついたときには、訂正しましたけれども、気がつかない間違いもあったでしょう。また私は本を長い間にかなり多く書いたのですが、一冊として間違いのない本を出したことはありません。私の著書あるいは訳註などの重版にあたり、何も直してないことはないと言っても、あまり間違いではなさそうです。それにもかかわらず、まだ気がつかない間違いがどこに潜んでいるかわかりません。諸君のライフ・ワークにはこのような不始末がないことを切望します。と同時に、完全無欠な著作でなければ公表しないとすれば、人文科学部門については、いかなる好著もおそらく著者の存命中には出版の機を逸するでしょう。或いは執筆起稿の意志をも失うようになるかも知れません。

過去五十年の間の仕事を顧ると、このように恥ずかしい有様ではありますが、さて五十年は長いようで、実はあわただしく過ぎ去りました。人生は決して長いとは申せません。短いのです。諸君は春秋に富んでおられるから、まだまだこれから五十年や七十年は十分に生きそうだと考えておられるでしょうが、しかし、“*Vita brevis, ars longa*”です。命は短いけれども、“*Art is long*”です。この *ars* を私は「学芸」の意味に解釈したいのですが、とにかく“*Ars longa, vita brevis*”であります。その短

い一生涯に我々はどういうふうに学問すべきであるか、それがこれから申し上げたい、平凡な、しかしばかにしてはいけない問題であります。

三

私がこれから申しますことは、みな誰でも知っている古人の名言の復習のようなことだけであります。今日はそのつもりでまいりました。ですから私は、私の勝手な思いつきを話すよりも、すぐれた人々の言葉を度々引用して、諸君の記憶を新たにしてもらいたいと思っております。それではつまらないと考える秀才は、時間の浪費をしないように、御退席をなさればよい、ただしどうぞ静かに。

私が選びました題は、さきほど引用した“*Ars Longa, Vita Brevis*”即ち“*Art is long, life is short*”であります。この意味のことが大昔ギリシヤのヒポクラテスの「格言録」にあり、ローマではセネカも同様のことを言い、それがヨーロッパ諸国にひろまったと言われています。*Ars* または *art* は、それではいったいどういう意味の言葉であるか。それが、これからの話の最初の問題であります。

この格言は「芸術（または文芸）は長く、人の命は短い」と普通には解釈されております。そしてそういう解釈も可能であります。しかし、英語の *art* にも、ラテン語の *ars* にも、ギリシヤ語の τέχνη にも、いろいろの意味がありますから、私はこの一句のばあいには「学芸」または「学問」という意味に取ることもできると思います。「学芸」と解釈される用例をいくつか拾いあげてみましょう。

英文学史上の古い時代、正確にいえば第十四世紀の大詩人、Geoffrey Chaucer の書いた、すこし長い詩 *The Parlement of Foulys*（もも鳥のつどい、または鳥類会議）の初めの所に、この言葉が訳されて、

The lyf so short, the craft so longe to lerne.

となっております。「生命は短い」には何も問題がありません。“craft”は“art”の意味であり、後半は、「その術を学ぶには時がかかる」という意

味であります。ただしチャーサーは学問や芸術のことを考えながらこう書いたのではなく、St Valentine's Day に因んで考えたのでありますから、いろいろな鳥が自分のつれあいを求め、その心を勝ち得るには、いろいろな手練手管を用いなければならない、それにはなかなか時がかかる、ということを軽い気持で書いたのであります。しかしそれはやはり学問のことにも適用できる言葉であります。

ゲーテの「ファウスト」にもこの格言が引用されています。ファウストの弟子ヴァーグナーの言葉の中に、

Ach Gott ! die Kunst ist lang ;

Und kurz ist unser Leben. (Faust, 558-9)

とあります。これを英語に訳せば、

Alas, art is long, and short is our life

となります。ただゲーテがここで“Kunst”をどういう意味で用いたのか、問題でありますけれども、のちにメフィストフェレスに使わせたばあい(1787行)と同じく、やはり「学芸」という意味でありましょう。

ゲーテはほかの作品においても同じようなことを書いております。それは散文でありますが、*Wilhelm Meisters Lehrjahre* の中で、ヴィルヘルム・マイスターがいろいろ修業をしたのち、免状——ま、卒業証書のようなもの——の中に、こういうことが書いてあるということになっています。

「学芸は長く、生命は短い。判断はむずかしく、好機会は飛び去る。

行動することは楽だが、考えることは重苦しい。考え抜いたことに従って行動することは面倒だ。」

そういう言葉がこの卒業証書に長々と書いてありますが、終りのところにこうあります。

「本当の弟子は知られていることからまだ知られていないことを展開させることを学んで、だんだん師匠に近づいて行くものである」。

(Die Kunst ist lang, das Leben kurz, das Urteil schwierig, die Gelegenheit flüchtig. Handeln ist leicht, Denken schwer ;

nach dem Gedachten handeln unbequem. . . . Der echte Schüler lernt aus dem Bekannten das Unbekannte entwickeln und nähert sich dem Meister. —Goethe: *Wilhelm Meisters Lehrjahre*, Siebentes Buch, Neuntes Kapitel, Lehrbrief.)

ここに「知られていること」というのは、学校の教科書に出ており、あるいは講義で聞いたことでもあります。それによって、「まだ知られていないこと」を展開させて行く。それが本当の修業でありましょう。そしてだんだん師匠に近づいて行くことになる。しかしこれはなかなかむずかしいことです。

四

シナの人も同様なことを考えております。当然なことです。私のこの話の副題にしました五つの漢字、「世短く、意常に多し」は、その一例です。これは私が勝手に作った漢文への翻訳ではありません。陶淵明という大昔、第四、五世紀の詩人が書いた詩の一句であります。陶淵明といえば、

菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る
という二行や「帰去来辞」などを思い出されるでしょう。そのように隱遁者らしくのんきな生活を送ったかのような印象を与えがちでありますけれども、実際にはそうではなかったようです。

彼の詩にはこういう五言絶句もあります。

盛年重ねて来らず、一日再び^{あした}晨なり難し。

時に及んで^{まさ}当に勉励すべし、歲月人を待たず。

二十代、三十代、四十代と長く盛んな年月がつづく人もありますが、盛んな年は重ねて来ない。朝日の出る時は一日に一ぺんしかない。我々はどんな時にでも勉励をしなければいけない。年月は我々を待ってくれない。そういう意味です。これは詩としてはすぐれた作品ではないが、陶淵明もまた「命短かく、学芸の道遠し」と痛感した人です。

この感想はいろいろな人々が言っていることであります。例えば、宋の

時代の朱子、本名は朱熹という儒者、おそらくシナが生んだところの最も組織的なこの哲学者は、こういう二行を書いたといわれております。

少年老い易く学成り難し、一寸の光陰も軽んず可からず。

諸君はもう少年ではないが、アメリカでは Boys! Girls! と呼ばれるかもしれません。とにかく少年老いやすく、やがては私のようになってしまいます。しかし学成り難しです。その点は老人である私にもあてはまります。一寸の光陰も軽んずべからず。断片的な時間を使わなければ、忙しい世の中では勉強はできません。この二行は朱子の作と伝えられておりますけれども、詩人としても秀でている朱子の作らしくはありません。詩についての批判標準即ち潜勢語に富むか否かという点から見れば、陶淵明のぼあいと同様、詩としてはすぐれた作とは申しかねます。余韻が乏しいけれども、しかし教訓としては適切な句と言ってよいでしょう。朱子の詩をもう一つ紹介します。

困学^{あに}の工夫豈成し易からん。

「困学」という熟語は、日本ではあまり使われませんが、いくら勉強しても、うまく行かないので困るが、困りながらも一生懸命勉強していることです。困学の工夫はしても、それが成功することは甚だむずかしく、また工夫をしなければ、独創性を発揮することは出来ずまい。ところが、朱子のような大学者でも、困学の工夫はしても成就することはまことにむずかしい、と歎いておるのです。それどころではありません。彼は偉大な学者でありながら、虚名をはせているのではないかと自ら反省し、そしてこの七言絶句を

庸行庸言も実は未だ能くせず

と結んでおります。「庸行庸言」の「庸」は中庸の庸でもあります。この意味はおそらく凡庸の庸でしょう。誰にでもできる普通の行いも言葉も、実は私にはまだ良くできていないと言っているのです。これはまことに謙遜な態度であります。こういう工夫をしないならば、我々はただ空しく馬齢を加えることになります。今は「馬齢を加える」という言葉はほと

んど使われないようですが、私の青年時代にはまだ手紙などに用いられました。あるいは「衣架飯囊」^{いかはんのう}、我々人間が着物をかける衣桁 (*Sartor Resartus* 参照。——附記)、また食べたものを入れる袋にすぎない器^{うつわ}になっは、まことに生きがいのないことであります。

T. S. Eliot の名はよくご存じでしょう。彼の亡くなったことが世界中に伝えられてその死を惜しまれたのは、今年の正月でした。そのエリオットの初期の詩の中に、

I have measured out my life with coffee spoons.

(*The Love Song of J. Alfred Prufrock*)

という行があります。これはエリオットが自分のことを言っているのではなく、コーヒー・スプーンで一生涯の年月を数えて来たような人間を憫笑しているのです。毎日御飯を何杯ずつたべるにせよ、その数で日数を数える人はいないでしょう。またICUの廊下にある30円のコーヒーを何杯飲んだかで単位を数える人もないでしょう。

しかし我々は知らないうちに、うっかりどういふ影響を世の中から受けてしまうかわかりません。Shelley という非常に理想主義的な詩人は、そのことを、“the contagion of the world’s slow stain” (*Adonais*, XL) といっています。世俗的なものが我々に与える影響は、大地震があつというまに大建築をも倒してしまふようなものではありません。実にゆっくりと、知らぬ間に忍び寄ってくるのです。世俗という流行病にかかることを我々は予防しなければなりません。それを怠るならば、我々は

A heart grown cold, a head grown gray in vain

(これもおなじく「アドウネイイス」の中にある句ですが)、というみじめさを年老いてからしみじみと感じなければなりません。心臓は比喩的にも常に暖くあるべきものなのに、世俗的になれば、いつのまにかつめたくなってしまう。また年を取るまではいろいろ修業すべきであります。卒業後何も勉強をせず、ことに人生についての修業が出来ていなければ、それはただ馬齢を加えるだけで、年をとっても無駄だということになります。

冷酷で思いやりがなく、そして年がいもなく愚劣な人間は、男も女も、実に醜い姿であります。

五

そういう不幸を避けるには、ICU に事かかぬ良い教師や良い友人に親しむことが大いに益をなすことは、改めて言うまでもありません。そして書物、良い書物を一生涯熟読玩味することは、我々にどれほど大切であるか知れません。今、良い書物と言いました。悪い書物のあることも、大いに注意しなければなりません。良い書物とは、“the precious life-blood of a master-spirit embalmed and treasured up on purpose to a life beyond life” と John Milton が申したところのものです。これは *Areopagitica* という名高い論文の中にある有名な言葉です。そのあたりを訳してみましょう。「人間には地上のやっかい者となって生きている者が多い。しかし良書は偉大な精神を抱いている人物の尊い心血(life-blood)を万代に伝える目的で、腐ることのないようにして貯えてある宝である。」そういう良書に親しむことを、私は今まで教室で多少は申してまいりましたが、ここで改めて御注意を惹きたいのです。くだらない本を読むことはつまらない。大きな損です。短い人生にそんな暇つぶしをしたら、あとでどれほど悔いてもしようがない。本のえらび方や良書をどういうふうに読むかということは、すべての人の大いに工夫すべき点であります。

私はここで近頃の著書から引用しますが、それは軍部の方針に対して毅然として大学の自治を守りぬいた東大総長であった小野塚喜平次という政治学者の言葉であります。小野塚先生には「現代政治の諸研究」という大きな著書があり、その中に、イギリスの外交官で歴史家で政治学者であった James Bryce が *The American Commonwealth* という名著を公にしたのち、アメリカ合衆国ばかりではなく、ほうぼうの民主国のことを書いた *Modern Democracies* という新著を、日本の学者、ことに政治学者のために、くわしく紹介した論文があり、それは百五十頁を占めていま

す。そしてその冒頭にこう書いてあります。

「漫然として万巻の書を読破するは、畢竟徒勞のみ。人生は朝露の如く、而かも為すべき事は益々増加す。良書撰択の必要は多言を費すに値せず。殊に政治に関する書に於てこの必要大なり。」

人は年をとるにしたがって仕事が多くなります、また時代が進歩するにつれて、仕事はふえます。然るに蘇東坡の詩にもあるとおり、「人生は朝露の如く」短いのですから、良書撰択の必要は喋喋するまでもありません。殊に政治に関する本についてはこの必要がことに大きい、とあります。しかしこれは小野塚先生が政治学者であるから、かように思われたのでありましょう。他の方面の書物についても同様ではありませんか。私は自然科学の専門書についてはわかりませんが、文学に関する限り必ず読むべき本も、読まなくてもよい本も、おびただしくあります。ベストセラー必ずしもベスト・ブックではありません。読まない方がよいのも少なくないようです。読むねうちの無い本にひまつぶしをするのは、惜しいことです。馬鹿氣たことです。

この点について私は、シェイクスピアと同時代の学者 Francis Bacon が書いた非常に有益な文章を、あらためて御紹介いたしたい。

「ある本はなめてみるだけでよい。〔これは読むに価いしないものです。〕のん気に読みすててよいのもある。ごくわずかな本だけは、全部骨を折って注意深く通読すべきものである。本によっては誰かに読ませたり抜粋を作らせたりしてよいものもある。しかしそれは、あまり重要ではない中味の本や、つまらない種類の本の場合にかぎる。その他のばあいには、要点だけを蒸溜した本は〔これは今の言葉で言えばダイジェストです〕蒸溜水と同じように味のないものである」。

(Some books are to be tasted, others to be read, but not curiously, and some few to be read wholly, and with diligence and attention. Some books also may be read by deputy and extracts made of them by others, but that would be only in the

less important arguments and the meaner of books: else distilled books are, like common distilled waters, flashy things.—

Essays, 1597)

うまいことを言っています。なお、この *Of Studies* という有名なエッセイからの抜萃のすこし先の方には、「読書は思想の充実した人をつくり、協議は当意即妙の人をつくり、またノートをとることは正確な人をつくる」と申しております。

(Reading maketh a full man; conference a ready man; and writing an exact man.)

六

バイコンと同じようなことをシナの人も言っております。「中庸」——「四書」の中の一冊で、孔子の孫が書いたと言われているこの本に、

博く之を学び、^{つまづら}審かに之を問ひ、慎みて之を思ひ、明らかに之を^{わきま}辨へ、篤く之を行なへ。

という名高い一節があります。自分の専門だけに甘んぜず、できるだけ広い範囲にわたって良い本を読み、不明の点は詳細に質問し、慎んで熟考し、そしてその意味をはっきり心得、それからそれを一生懸命に実行することです。そしてこれは読書によって学んだことを道徳的生活の法則とし、それを日常の行為として表わすことを主とする教訓であるが、これを研究上の指針とすることもできましょう。

さきほど引合いに出した儒者朱子は、「読書に三到あり」とも言っています。三到は三つの行きとどいたこと、すなわち *fulfilments*, *accomplishments*, 或いは *attainments* というような意味でしょう。

読書に三到あり、心到り、眼到り、口到る。

「心到る」は、心が充実されて豊かになること、「まなこ到る」は、眼が鋭い観察ができ、また眼界が広くなること、「口到る」は、よく話ができるようになる、適切な表現ができるという意味のようです。

昔から我々の国でも「眼光紙背に徹す」という言葉が使われています。比喩的に眼の光が本の裏まで通るほど鋭く読みとることは、想像力や知力の強烈な人でなければ出来ないことですが、これは英語の“to read between the lines”という熟語と同じく、読み方の秘訣であります。活字を追って読んで行くだけではなく、その裏にひそんでいる意味を探ることです。行間に潜伏している意味を detect することです。いわゆる「読みが深い」ことです。そういう細かな検討をしながら読むのでなければ、本当の読書家ではありますまい。また思いがけない解釈上の発見をすることもありますまい。

イギリスでもアメリカでも、近頃は批評家たちが新しい批評法をとнаえてまいりました。New Criticism というと非常に新しく聞えますけれども、実はそんなに新しくはないようです。以前から唱えられた読み方に多少の新しみを加えたものであります。前にも、すぐれた批評家はそういう方法を心得えていました。“There is no new thing under the sun.”古いところと言っても第十九世紀になりますが、ジョン・ラスキンなどもそれを試みているのであります。I. A. リチャーズとかウィリヤム・エンブソンなどが英国ではそれを早く実行した人々であります。

そういう読み方でクラシックと呼ばれている著作（それは大学のクラスで読む本とは限りません）、すなわち標準的著作を我々が一生懸命に勉強して十分に理解しまた批判することが出来るようになるならば、我々も読書による三到すなわち三つの修業を遂げてその効果を収めることになりましょう。そして私はここに、読書による三到を実現した政治家や外交官など数人のことを一言しましょう。そのうち最も著るしい例は英国の政治家 W. E. Gladstone であります。

グラッドストンに政治上や宗教上の問題について数多い著述があることは、御承知でしょう。多忙な一生をおくったこの政治家は、ホウマー研究者でありました。ホウマーについて彼は、私の知っているところでは、すくなくとも四冊の大著を世に送っております。そればかりではありません。

彼はダンテの研究者としても注目される人であります。もちろんギリシヤ語でホウマーを読み、イタリア語でダンテを読んだにちがいないのであります。そしてダンテの「神曲」からは、ところどころの翻訳もしております。敬服に堪えません。ただしこのようにすぐれた読者でもダンテから引用した行に誤りがあります。しかもその誤って引用された行がマシュー・アーノルドや T. S. エリオットにそのまま伝わっているのです。そして T. S. エリオットにはすぐれたダンテ論があるほどですから、彼はダンテを直接原文で読んだにちがいませんが、グラッドストンやアーノルドと同じ誤った引用をしています。しかもそれは非常に有名な行であります。これは些些たる間違いであるけれども、私がこれを指摘したのは、学問の世界ではいかなる間違いもゆるされないこと、またこれらの大家でも完璧ではあり得ないのであるから、我々は十分に注意して正確を期すべきであることを明らかにしたいからです。

〔1844年一月二十一日、グラッドストンは夫人にあてた手紙に、*Paradiso*, iii, 85を

In la sua voluntade è nostra pace.

と引用し、そしてこれに対する感想を次のように述べている。

The words are few and simple and yet they appear to me to have an inexpressible majesty of truth about them, to be almost as if they were spoken from the very mouth of God. It so happened that (unless my memory much deceive me) I first read that speech on a morning early in the year 1836, which was one of trial. I was profoundly impressed and powerfully sustained, almost absorbed, by these words. They cannot be too deeply graven upon the heart.

実に立派な読み方である。ただ引用の一行は、特にイタリックで示したように、

E la sua voluntate è nostra pace.

とあるべきものである。Matthew Arnold も名論 “The Study of Poetry” (1880) の中で同じあやまちに陥っていることを見ると、当時世に行なわれたダンテ版には、そうになっていたのかも知れない。とにかく、エリオットも *Dante* (1929) と題する小冊子にはこの行を二度 (pp. 52, 59) とも、

la sua voluntade è nostra pace.

と引用している。ただし *Selected Essays* (1932), p. 251 には、*voluntate* と直

している。以上ダンテの原文について私が根拠とした版は、E. Moore のイタリヤ文全集とエリオットも引用原典としたという Temple Classics 中の *Paradiso* である。——附記]

H. H. Asquith (のち但爵)は英国自由党内閣の首相であったが、古典文学や英文学に関する講演集を残し、また保守党首相 S. Baldwin の数冊の講演集中にはすぐれた文学論が散在しています。彼ののちに社会党内閣が英国にはじめて組織された時の総理大臣 Ramsay Macdonald は、文学や哲学に関する著書がないようだが、非常に読書の範囲が広い人であったそうです。今年二月世を去った Sir Winston Churchill のことは申すまでもありません。(彼は曾って議会で演説する前に、「悲劇を書くにも喜劇を書くにも必要な素質は同じだ」というアリストファネスの原文を調べてほしいと秘書たちに言ったところ、オックスフォードで古典を勉強した秘書が、「アリストテレスではございませんか」と聞いた。チャーチルはそれを強く否定し、「プラトンかな」とつけ加えた。大臣室には Loeb 版プラトンがあったので、プラトンの「饗宴」に、アリストファネスにソクラテスが言った言葉として出ていることがわかった。チャーチルがその本を読んだのは五十年も前のことであった。——附記) また先程のブライス。それからフランスの外交官で長くアメリカ駐在大使をしていたジュラン(J. J. Jusserand)はすぐれた英文学者でもあり、初期からシェイクスピアやミルトンにいたるまでの遡大な三冊の英文学史などを書いていきます。そればかりではなく、中世後期の英文学に関する立派な著述もあります。(専門外の著書で名高い外交官としては、六年間も日本駐在英國大使であった Sir Charles N. E. Eliot も忘れられない名である。この人は海産生物学に関する研究論文もあるが、*Hinduism and Buddhism* という名著三巻や *Japanese Buddhism* の著者であり、そして公文書中にしばしばシェイクスピアを引用した。——附記)

私はこういう人たちが外国にはあることを思うごとに、日本にもそういう読書人である政治家、財界人、自然科学者が出てくることを切望しない

わけにはまいりません。一般教育に重きを置く ICU の卒業生にそれを期待することは、無理でしょうか。

七

さきに述べたように、「読書に三到有り、心到り、眼到り、口到る」であります。そして「口到る」ということは、外国語の研究についても言えましょう。しかし外国語に熟達することはなかなかむずかしい。私も何十年かの間、一生懸命に勉強したつもりですが、依然として呉下の旧阿蒙であります。

外国語は、我々がヨーロッパやアメリカの言葉を学ぶ時にむずかしいばかりではありません。ヨーロッパ人あるいはアメリカ人が日本語を学ぶときも、同様に困難を感じるにちがいない。ロンドンの放送協会から出ている *The Listener* は日本のたいていの週刊誌とはちがい、相当程度の高い週刊誌ですが、昨年のクリスマス前日に出た号に James Joll というオックスフォードの先生が放送したものが載っています。ジョル氏は政治史専門の学者で、昨年数カ月東京大学で講義をしていました。当時の見聞に基づく観察である “Japan, Asian State of Western Society” という題の放送の第一回が出ているのです。これは外国人が現在の日本をどう見ているかという点については、「他山の石もってわが玉を磨くべし」で、一読に値するものであります。この雑誌は ICU 図書館に多分あるでしょう。

ジョル氏の書いていることは大体正確な観察ですが、そこに誰がえらんだのか、惜しいことに、日本の現状をあまり適切に表わしてはいない三つの写真が出ています。その一つは日本の家庭の写真です。畳の上に中年の婦人が二人坐っていて、まだ十二、三歳ぐらいに見えるお嬢さんが踊りの稽古をしているらしい。ところが、その説明に、母親がその娘に “the ancient art of Geisha” を教えているとあるのには、驚くほかありません。その「芸者」という日本語は、英国や、アメリカの辞書にもちゃんと出ている言葉であります。英国の有名な辞書は “a Japanese dancing

girl”とだけ説明しています。だから芸者と“dancing girl”との区別が、この写真を選んだ編集者にはわからなかったのでしょうか。そして我々もこのように、いろいろなニュアンスがわからずに外国語を使っていることがあります。ありはしないかと、私は自分で警戒しているのです。それに反し、現に日本語の中に、どこの国語かわからない英語風の珍妙な言葉がはびこっています。外国語のもとの意味からひどくかけはなれた言葉がさかんに幅をきかせているのはどういうわけでしょう。浅はかな、また浅ましい西洋かぶれの徴候ではありませんか。

I C Uではその外国語や外国に関する勉強を重んじています。これは非常に結構なことですが、ここでもう一度、T. S. エリオットの言葉を引かせて下さい。

Knowledge of words, and ignorance of the Word.

(*The Rock*, I)

この意味はおわかりでしょう。さまざまな外国語を知っているけれども一番肝心の御言葉を知らないでは困ります。“Ignorance of the Word.”このWordは大文字で始まります。それはロゴスです、キリストです。我々の大学には、(私はまだ我々のといってもよいと思います)、きちんとした生活をしているなら神を認めない人はいないはずです。けれども、うっかりしているとどうなるかわかりません。T. S. エリオットはこの一行をふくむ詩の別のところにこのように書いています。

Here were decent godless people :

Their only monument the asphalt road

And a thousand lost golf balls.

(*The Rock*, III)

このようになっては大変です。エリオットはもちろんI C Uを念頭に置いてこれを書いたものではありません。ここに諷刺されているような人間にならないためには、新約聖書、その他の良い本をもっとよく熟読して、その教えを身得しなければなりません。

曾てオックスフォード大学でシェイクスピアに関する講義を聞いていたとき、英文学の G. S. Gordon 教授は、「シェイクスピアのような大天才たちは不思議な病気にかからないわけにはいかない」と言われるので、私は何の病気だろうと耳をそばだてました。そして教授は、「その病気は絶えざる努力を続けずには居られない努力連続症である」と断言しました。またトマス・エディソンの名はよくご存じでしょうが、この大発明家は「天才というものは」と聞かれたとき、“Of inspiration one per cent, of perspiration ninety-nine.”（靈感は1パーセント、流汗は99パーセント）と答えたそうです。これらのことを考えれば、自ら秀才或いは天才をもって任じ、いたずらに放縦な日々をおくる者は、まさに慙死するかも知れません。また自らの天分の乏しきを歎いて茫然たる者は、大いに発憤努力するでしょう。

終りに、すぐれた人々がICUから、毎年広く世に送られるにちがいないと思いますが、この大学の建てられた目的が諸君の努力によって達成される日の遠くないことを心から切望いたします。

（これは、今年三月五日、コンヴェンションにおける講演の速記を簡潔にしたり増補したりしたものです。全然触れなかった点の増補は「附記」として括弧内に入れておきました。）